

共生社会を生きる子どもたちに育みたい力

「10人に1人が海外ルーツ」となる未来に向けて

NPO法人青少年自立援助センター定住外国人支援事業部 責任者 田中 宝紀



たなか いき

16才で単身フィリピンのハイスクールに留学。フィリピンの子ども支援NGOを経て2010年より現職。「中央教育審議会」臨時委員（初等中等教育分科会）他。著書『海外ルーツの子ども支援言葉・文化・制度を超えて共生へ』（2021年、青弓社）。

「二〇二二年三月三十一日現在、日本に中長期間在留する外国人の方々の数をあらわしたものです。総人口の約2%と捉えるとそれほど多くないと思われませんが、外国籍だけでなく、両親またはそのどちらか一方が外国出身者である日本国籍を持つ方々や帰化した方々を加えれば、「海外にルーツを持つ」人の割合は上がり、すでに日本社会は、多様なバックグラウンドを持つ人々が共に生きる「共生社会」であることがわかります。

ある推計（注）によれば、二〇六五年には海外ルーツ人口の割合は全体の12%（8人に1人）にまで上昇するとされています。若い人ほどルーツの多様化は早く進み、わずか8年後の二〇三〇年には0歳から9歳の内の10人に1人が海外にルーツを持つ子どもになるそうです。つまり、今の子どもたちが大人になる頃には、今まで経験したことがないような共生社会が待っていて、これまで以上に、多様な人々と協働する環境を前向きに捉えることができるかどうか、大切な「生きる力」の一つとなります。

私は、東京都内を中心に海外にルーツを持つ子どものための専門教育支援事業「YSCグローバル・スクール」を運営しています。スクールではこれまで、年齢や国籍、宗教など、多様な背景やニーズを持つ子どもたち一四〇〇名以上をサポートしてきましたが、出会った多くの子どもにも共通していることが1つありました。

それは、彼らが学校でのいじめや生きづらさを経験しているということです。スクールには、日本語がわからない状況の子どものみならず、日本で生まれ育ち、日本語の会話はネイティブという子どももたくさんいます。彼らの多くは、言葉の壁を乗り越えていようがまいが、いじめを経験しているのが現状です。つまり、肌や髪の色が違うこと、親が外国人であることなど（いわゆる「日本人とは違う」ということ）で、周りの（日本人の）子どもから認められず、いじめの標的となっていると言えらるのです。

こうした状況は決して許されることではありません。しかし同時に、（日本人の）子どもたちが、「自分（たち）」とは違うこと」

を前向きに捉えることができないまま大人になってしまっても、見過ごすことはできません。それが10人に1人以上が海外ルーツという未来において、子ども自身にとって良い結果をもたらさないことは明らかであり、ルーツを問わず日本で成長するすべての子どもたちに対して、共生社会の中で必要な力を育むという視点が重要ではないでしょうか。

そこで取り組みたいのが、「ダイバーシティ教育」です。ダイバーシティ教育とは「人種・ジェンダー・障害・価値観などが多様であることを理解し、相互に尊重する態度や行動を促す教育」とされています。

よく例として取り上げられる、あるクレーンのセットには「ビジュアルカラーズ People Colors」というシールが貼られています。そのセットに収められているのは、黄色や薄ピンクや深い茶色など、多種多様な人の肌の色のクレーンです。このクレーンの存在は些細なものに感じるかもしれませんが、しかし、それを手に取る子どもたちは、「自分の肌の色が

ある」という環境を通して、自分が「認められた存在」であると感ずることができると言えます。

他にも、登場人物の多様性が高い絵本や書籍を選んだり、掲示物を多言語化したりなど、多様であることは、当たり前で身近なことだと言つことを、経験的に感ずることができると言えます。環境を整備していくと良いですよ。

近い将来、これまで以上の共生社会の担い手となる子どもたちが、多様な人々と共に自分らしく生きることができるよう、その成長を共に支えていただけたらと思います。



（注）加藤真『日本における外国人に関する実態と将来像——「これまで」と「これから」の整理』SYNODOS
<https://synodos.jp/opinion/society/20359/>（最終アクセス 2022年6月12日）